

全盲のテノール歌手新垣勉さんが
一関でコンサート

希望の賛歌

全盲のテノール歌手新垣勉さんが12月1日、一関文化センターでコンサートを開き、市内、平泉町、陸前高田市と遠野市から参加した13校約千人の中学2年生（一部3年生含む）に勇気と希望のメッセージを贈った。光のない世界に生きる新垣さんが伝えたものとは？

01 上質時間 中2生を招待 新垣勉コンサート

Aragaki Tsutomu Success Story

会場のざわめきがやむ。静寂を破るピアノの旋律が流れ、テノール歌手新垣勉さんの伸びやかな歌声が響き渡った。一関

文化センター大ホールを埋めた1200人が一気に引き込まれる。上質な時間はこうして幕を閉じた。

「新垣勉おしゃべりコンサート」（中学2年生に新垣勉コンサートを贈る会主催）は12月1日、一関文化センターで開かれた。全盲のテノール歌手新垣さんの歌を通して、心身の変化の激しい中学2年生に人生のモデルとなる人との出会いを提供したい、大切な存在だと伝えたい、と有志が実行委員会を立ち上げて開催。希望した一関地方（一関市と平泉町）の10校、陸前高田市、遠野市の3校の中学2年生が無料で招待された。

同日は一般（有料）の入場もあり、大ホール（1200席）は満席。新垣さんが発信した勇気と希望のメッセージを全身で受け取った。

新垣さんは「スマイル」でオープニング。続いて「アベ・マリア」「雨ニモマケズ」や東北地方太平洋沖地震の鎮魂歌「青い海よ」など全9曲を熱唱。曲間には、自身の苦難や逆境を乗り越えた経験談や人との出会いの大切さなどを語り、客席を釘付けにした。

フィナーレは「翼をください」を会場の全員で合唱。感動の90分に幕を閉じた。

02 波瀾万丈 全盲、両親離別… 壮絶な半生

Aragaki Tsutomu Success Story

Try to Be the Only One
Aragaki Tsutomu Success Story

新垣さんは1952年、沖縄の読谷村に在日米軍人の父と日本人の母の間に生まれた。出産直後の不慮の事故で両眼を失明。光を失った。

物心もつかない1歳のとき両親が離別。父は本国アメリカへ帰り、母は諸事情で新垣さんを手放した。その後は母方の祖母に育てられる。祖母を母と、母を姉と聞かせられて育った。戦後、日本は独立したが、当時の沖縄はまだ米国の政権下。住民による祖国復帰運動などが活発化する中で思春期を過ごした。

出生の真実を知ってからは、不遇のわが身を呪い「自分には生きる価値があるのか」と、自死を試みたこともあった。「両親を殺して自分も死ぬ」と思い詰め、絶望の少年期をさまよった。さらに追い打ちをかけるように、14歳のとき唯一の理解者だった祖母が他界し、天涯孤独の身に、生きる希望を失った。

1 伸びやかな歌声で全9曲を熱唱した新垣勉さん
2 主催した「中学2年生に新垣勉のコンサートを贈る会」の皆さん
3 フィナーレは、一関地方、陸前高田市、遠野市から招待された1,000人の中学2年生や一般客と「翼をください」を合唱



ある日、新垣さんはラジオから流れる賛美歌に心を動かされた。導かれるように教会へ向かい、そこで一人の牧師と出会う。新垣さんは、波瀾万丈の人生を牧師に話した。牧師は黙って新垣さんの何もかもを聞いた。そして、泣いた。「自分のために泣いてくれる人がいる」

03 転機到来 逆境を乗り越え 夢をつかむ

Aragaki Tsutomu Success Story

牧師との出会いはターニングポイントになった。牧師は新垣さんに、声楽家になることを勧めた。将来に向け、希望の光が差した瞬間だった。こうして少しずつ自分の人生を受け入れ始めた新垣さん。逆境をばねに、前に進み始めた。牧師を目指して高校、大学と勉強に励んだ。聖歌隊として奉仕活動にも参加した。その頃から、新垣さんに、たくさんのいい出会いが訪れる。大学在学中には、イタリア人ボイストレーナーのアンドレア・ブランドーニ氏に「日本人にはないラテン系の素晴らしい声」と称賛された。さらに「あなたの歌声は、神からの贈り物であり、お父さまからの贈り物でもあります」と言われ、少しずつ両親への憎しみやわだかまりは薄れていった。同時に自分に誇りを持つようになった。

声楽家としての道を本格的に歩み始めた新垣さん。歌を極めるため、34歳で武蔵野音大に入学した。大学院修士課程を修了し、プロのテノール歌手になった。

14歳の心に響く成熟極めた美しい歌声。深く、やさしく、温かく…

